世説児談　一

ロ 9
3558
1

兒談序

淮南子曰、牛ハ岐蹏而戴角、馬ハ被髦而全足者ハ天也、絡馬之口、穿牛之鼻者ハ人也、循天者ハ與道游者也、隨人

3558
1

兒談序

淮南子曰牛岐蹏而戴角馬被髦而全足者天也絡馬之口穿牛之鼻者人也循天者與道游者也隨人

小幡文庫

ロ9
3558
1

者、與倡交者也、夫井魚不可與語大拘於隘也、夏蟲不可與語寒篤於時也曲士不可與語至道拘於俗束於教也故聖人、不以人

滑天不以欲亂情夫情生於好惡矣、衣食居淫之欲天下一體也欲四之美者情也、是以奪爭起矣、喜怒哀樂又可公乎、故聖人制

情、而無愚智賢不肖之差、由道一者教也、若禁情而欲一天下之人、猶於水中而求火也、雖聖人豈可得乎、一兒在洛之南、聰惠多

學、瞀通古今之變矣、或人記其話、名曰兒談、全八卷、我友北臻氏嘗云、夫欲知於人情者、則不可不由此書也、亟備不朽、予難如之何、故考訂

之備不朽云爾

昔延享丙寅歳二月朔旦

日本　璧雅亮撰

皃談巻之一

神道本

家で國乃家中なる人が思ふ。洛陽近き處み。十一二歳の児ありけり。常に詩經を読む。此其の書ハ源氏物語なれども。読くよみて。人情を知るかて紙乃こ本意とし。まさ古つふ弘く世くれ至じてハ。人情をよく志るふ。益ありとて史記漢書歴代乃書なり拐撰し作り。子類

は老子にて本として。ちと深かれど。皆智術の
あをりかへし者ゆゑの人見るらん。此つゝ
しを得らん。民乃あやしく見れば。善なりといふ
のにほひのうせし。身害多し。子類乃書は民乃
あやしめざる所は。あらじとす。秘し。此国の三部に
書物とてなし。此外の文字もなし。蘊奥のを
とし給ふは。神君のりさ法でおるまれつゝひ
くあるものは。まつ。あらばあるものゝもとず文面

評曰日本記者違意也非終辞

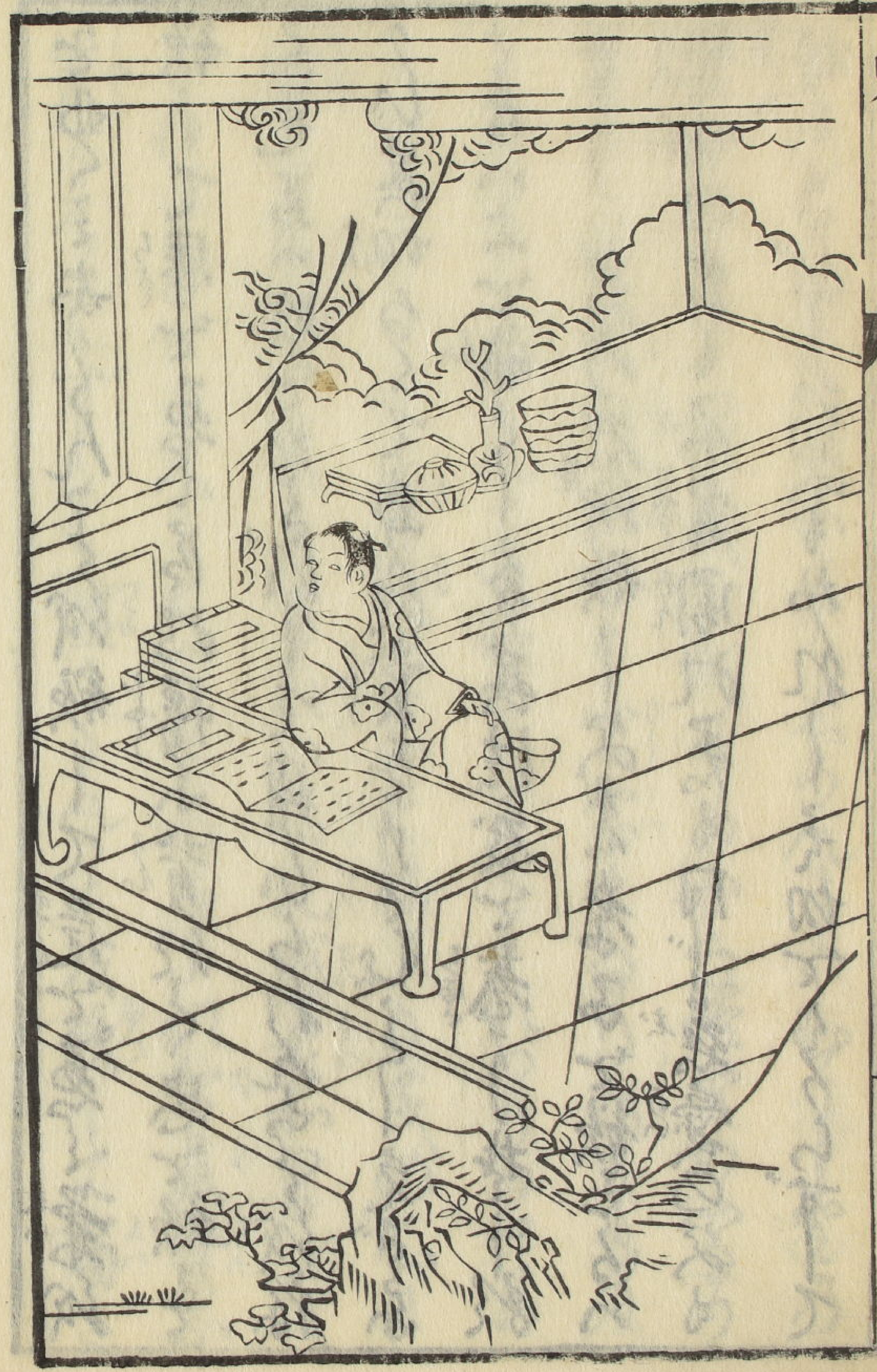
乃法に見せしめんとなり。智術なる書といふ下し
神道は其旨に似たりしまゝ人なりする様也。是に在し
へ給ふなり日本紀はおもうて。あすまれとゝもし
然はいへども今の世乃人。氏など少し讀覚ゐる
日本記の文を法とする事といひ侍る津となりと
此ふは事紀法されしより後人王紀乃文を皆
くみたらも神代君形勢といふしく似で費るなく
もとれる意ある文の善悪はいふといひ給はず

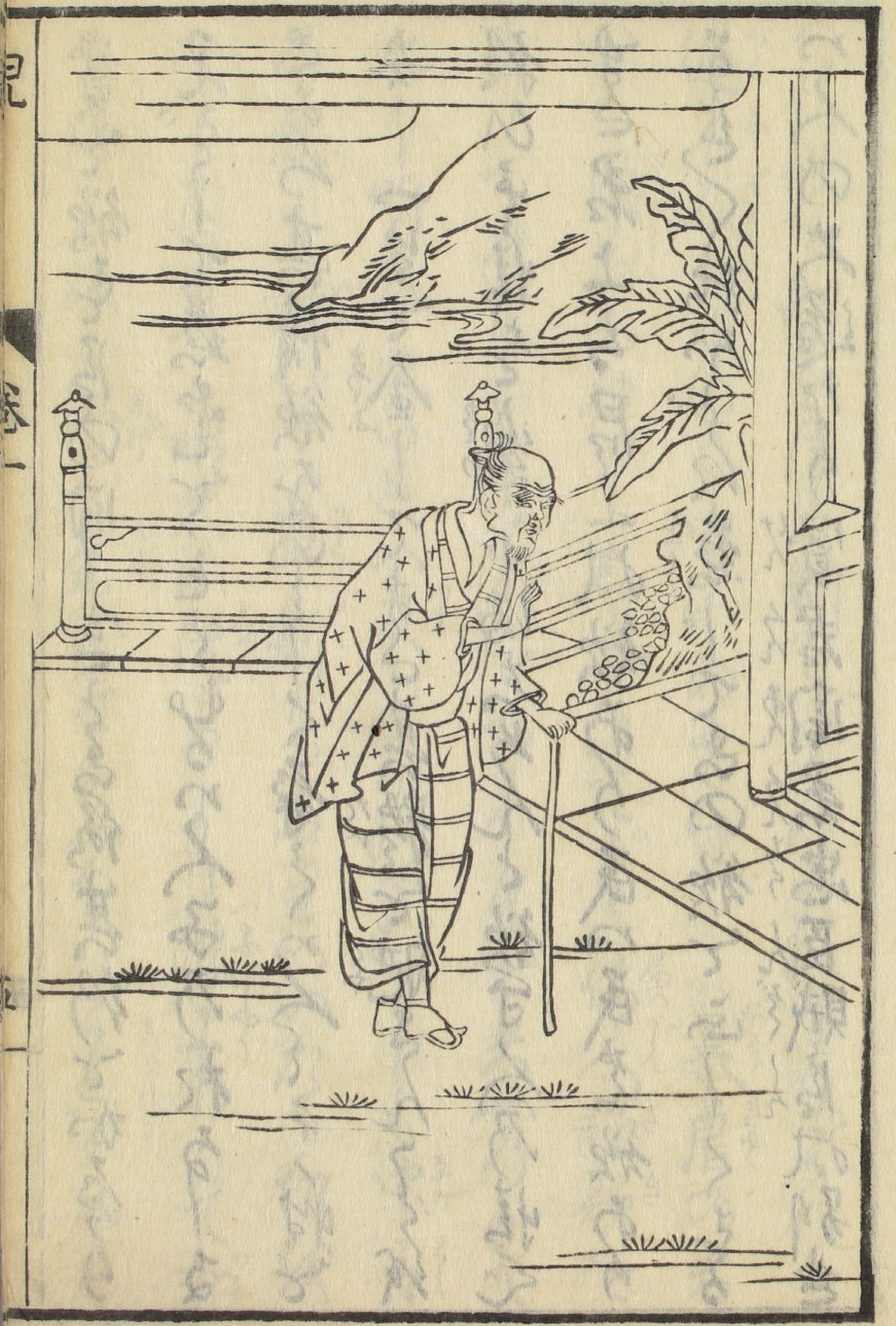
して神代乃巻の文勢ならて人王紀にうつ
りもてゆく日本紀の文ハいふをもさらにけんなる
博さわしといふみゝにあらバ日本紀の文を
古文辞のやうにかざ致(おもむき)など。いふハ博士あげ
ま日本紀などとてかゝるこの國の古き書なし
あまたをいつくまえれむ。のしとすわふあらとひ
西へしといふとも日本紀を貴(たふと)くさらへきの國より
忠あるたりすして智術の書なる所屋ならし

もとよりかきなつめたるとおもはずうし舎人
親王乃撰りつりては。いとめでたかるべし日本紀
ハ此国の道をよくしれなし待まし。中華(もろこし)乃教
を立天下を治め給ふ聖(むじゆう)ハ情欲(じやうよく)を制(せい)して万民
の情欲をひとしく存ひるもふやうに導(みちびき)く仁乃
佛世と名(なづ)けふも。いとをろかなるやうに太平無
為乃こと代六經(りくけい)諸傳(しよでん)はかきのきく後世(こうせい)に志め
し人かれ情欲をなくてかなへざる法なき也。いよ

くはしく道によらず志あんとくむかし聖乃
法度をなし礼義を制しまた三綱五常を以て教
へし野處穴居より宮室となり衣服も男
女安楽なりきんとの欲よりげうくるれば君臣
上下となりて貴賤定際芸術より民の心は
貪る事いと甚しければ治乱盛衰かるく
なれば世も久しくてくさは臣下の智愚賢不
肖をえらばずして彊からんと欲して弱さ

をあくて安からんと欲して危を悪み栄を
欲して辱を悪み臣は情に背きて忠を欲すと
ふ也臣は君をないがしろにして用ひられんと欲し
ぎ其功なくして身に賞をのぞむ。そしてえざるに
と責は上を非とし身を其法度を蔑り挫して
なり　君乃臣を欲して父母孝子を欲さるは
賢明の君も不肖闇れ君も同じ慈愛の父も
頑なきびしれ父もわれしてた切てくらずして





貴を欲さる者の同しきなれ共其行とかはり
ろんじて慈愛をとゞむるハ人子乃れなすを
さあるハ其情欲をいましく守るハ人乃性を
安し一生を全(まつた)ふしてまた其體(たい)を肥(こや)さんとて欲
好ひハ情を楽(たのし)ミ酒をなめんと欲す人乃情と
また君上ハ君上れ欲あり民ハ民なる欲あり
それぞく分限に應(おう)じて其の欲を正しくする
ハ人の大道なり賢君(けんくん)闇君(あんくん)忠臣(ちうしん)賊臣(ぞくしん)乃別も

ハ情欲を制すと否と制をざるによれなり是れを
過不及(くわふぎう)といひて中にあらず。暴虐(ぼうぎやく)の君
いく賊臣(ぞくしん)ハ様々ものぞみて佞人(ねいじん)諂欺(てんき)を
なして忠臣をあんせ。國をも亡ぼし身を失ふ乃ハ
なり明君ハ過不及をなさぬゆゑ。むかしも中庸(ちうよう)
乃奏(そう)し諫(いさ)むるハ草創(さうさう)剣菅(けんかん)君をハいたく切嗟
なし其身ハ水火の流ゆより浮上(ふじやう)ありてが
た佛子孫も繁(しげ)く榮(さか)へさせまふるハ乃道を正

さる賤人だに國も亡ひ御身をも失せ給ふなるとて
諫め侍る文中臣祓とて貴く世に翫び奉る
よ禮君臣をたりどもちひの我もろく民どめ
ぐみ仁道を鳥獣までに行ひ給へとなり此文を
今の文あり故へば今川乃文と同じき也中臣
祓ハ古の文にて俗間に通じがたし。とかく今
川なんぞよりよく通じまするは中臣祓にもまさり
くさぞおはりて神慮にかなひ侍るはずの哉

も情欲を制して道によろしく國家を安し
つまり食をしりて佳名をあげ忠孝ある人に
なさんとのことへのみ。去禮聖乃道にくはしく
うみきえあり給ふ六籍乃意ありきのはずく
かなふべし。吾の國は神は言葉にをしへ給ふを
忌給ふゆへは神秘と称しおさへとあり器
物をかりて人道をあらはし給ふ神乃御意なり
聖賢道も和古ハ文字にあらはしあそばされく

多く次乃天子にゆづりまゐらする寳の中にも
さ徒とのさし使ひまし玉ぬのくぞの有職と
せしまはさるなり。お世ぞうし無為の事不言
乃教なり神の教へられ〻とおとしめふるれど
今はいさしくて禁止万民志るべとすべし
むかしよりのならはし貴切でなきことものは事に其
事好玩ぶるし者に拘りて書にあらはさんは変
其依つ紙心にかくべきものは其道に至まり

なりといふべし多くの人は劔もちゐるを今の世にまくはなき
とあり劔術者流などいひ多く執行あるが中に其
藝他の道にもまさる用ひて切さるべからざるき
うへは昔物頼乃頃は武藝に家きいまりて師
範なくありしてきかさる荀子曰善為詩者
不説善為易者不占善為禮者不相とあり
まさ管公明も善易者不論易といへりゆへ
身に其事なり誰もたゝく志々けた志る道に聖人の

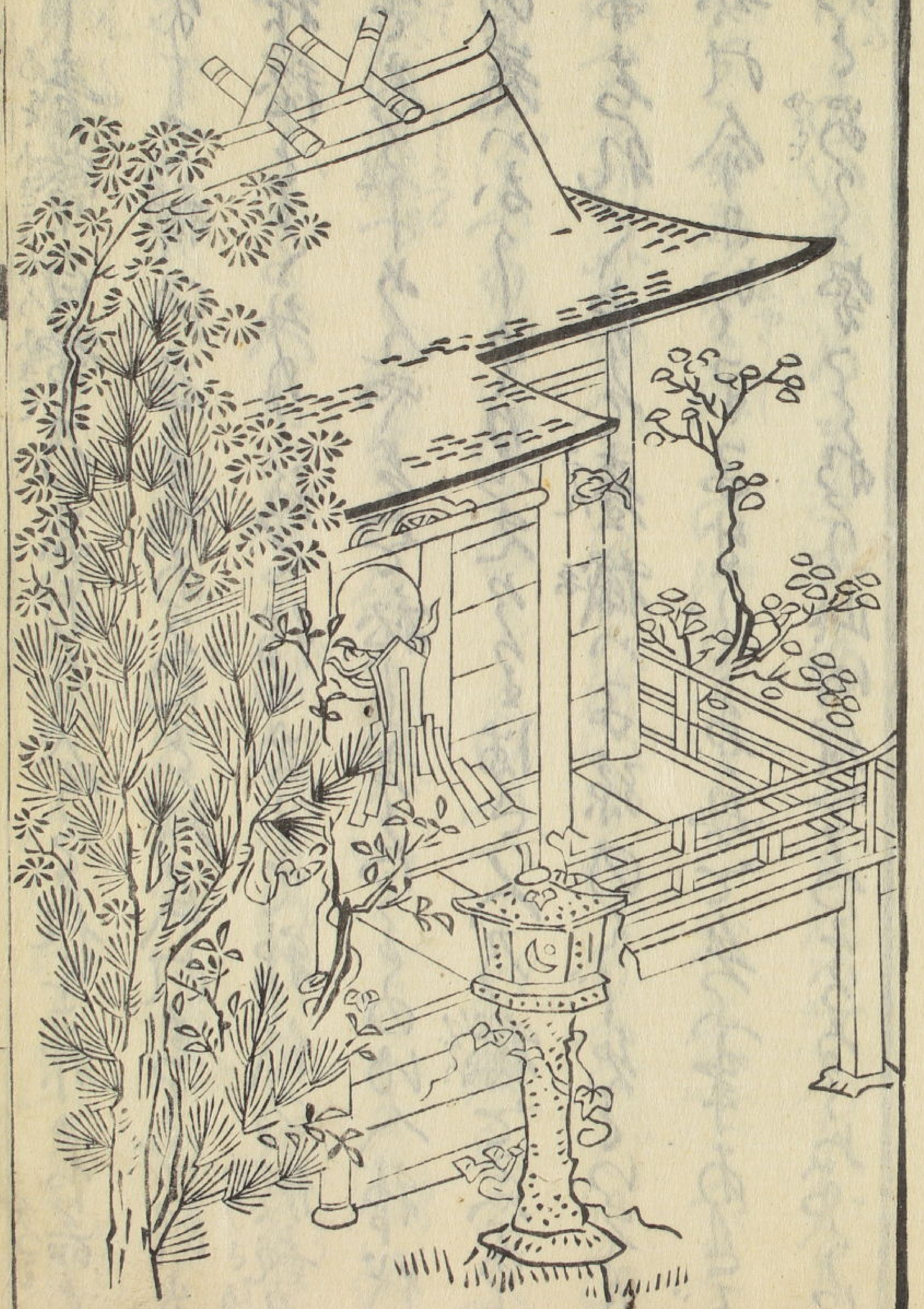
曰ふもむかし是上智ハ愚なるがごとしとぞ云ぞ
龍乃登天すれバ甚いさましきことなれども
さかりすぐといへる亢。天れ後に龍あらず
となるなど不白不論も易に用ひざるなり
ひとしく切紙なさんとなり其詮あることハ我
よりいふも執行者不足といふ極じが大概ハ智
の浅きハ智と見え勇なり少きハ勇と見ゆるこの
勇ハ血氣乃勇なり等しきもの徳ハ俗人の目に

勇ぞと見ゆる所ぞ。上智乃人ハ其差をよく差別
し勇なりの人ハ才能を用ひとありこれを譲
曰樽の満るハならざれど不満ハなる体とはさるすし不
満も人の好まざれどもハなるべしとされし学者
も是をよく考へて所ならば満る樽なる
傾しれどもけし鳴也学乃博きハ人なり
業しく志ざ好みにあきたらずして学の少きを
人乃問ひに答るにも我より慢して人を

さしのきを言ふことなくハ其学ハとくなるべし。なから
ばふぞよしとせば虚しき樽いふがごとし又
術乃益なし人もまた不学なるゆゑに人を服
させるの言葉を欲といつてもあさいさと学んでなかひ
ありとおもふハ性質の然らざるゆゑなり博学有徳
の君子ハ人情の博く行ひて正道なりしいたるゆゑ
あまたに制ふるに過不及なきがゆゑなるなれバ神乃教も
是に同じくしてあまたに體して言ものとせよと

ふかゝ鏡に向ひて見るにかくのごとく人乃行ひ
もあらたしと神宗に鏡を出すなり。この鏡を
すなはち見るにかくいふハ聖の道に協ひてあふ
なり。今の世も聖君乃みよ徳とも万民なるざ
給のこ大名ハ諸侯なり諸侯を封建とし聖
乃立給ふ法なり。あさ所ありし貴に名主五人組
のあるハ卒伍の法とし周の世に聖乃立なる
万民をひとしく治しあふるなりされバ聖の道

評曰嘗神道者不可言也故予從世俗而辨之



こと周にいたりて全くそなはれるゆゑに其紙なくし法度を立るに世を久しく。是に違ふ心その国ほろぶるなり。ちぶいゑんばをおりて身を以民をないがしろにして情欲を制をほしいままをことはかくある時は乱にいたるなり称て其乱をしづめ世あふに幣帛を持三軍乃師とおこり治世をなすを庶しかも有徳の人より志ありおふにより神祭に五幣はあるまゝに又は幣乃数にく外に意あ

し青幣白幣乃ふあり今これを神器と
なして神の本意あることハ民ハしらざれども
神秘とかくしおかれ侍るまして神代の形勢
をしりしめんや是を秘しおくものゆゑ神代
の事ハおかしく見えたる里博き人乃穢と忌なる
ふしぎなれく前の産穢ハ子孫のたしなみといへど
女乃命ふかく王子生じ給ふ母で多く事あるまじ
けとあるも勢ふなりける此時代をみるそのゆゑに

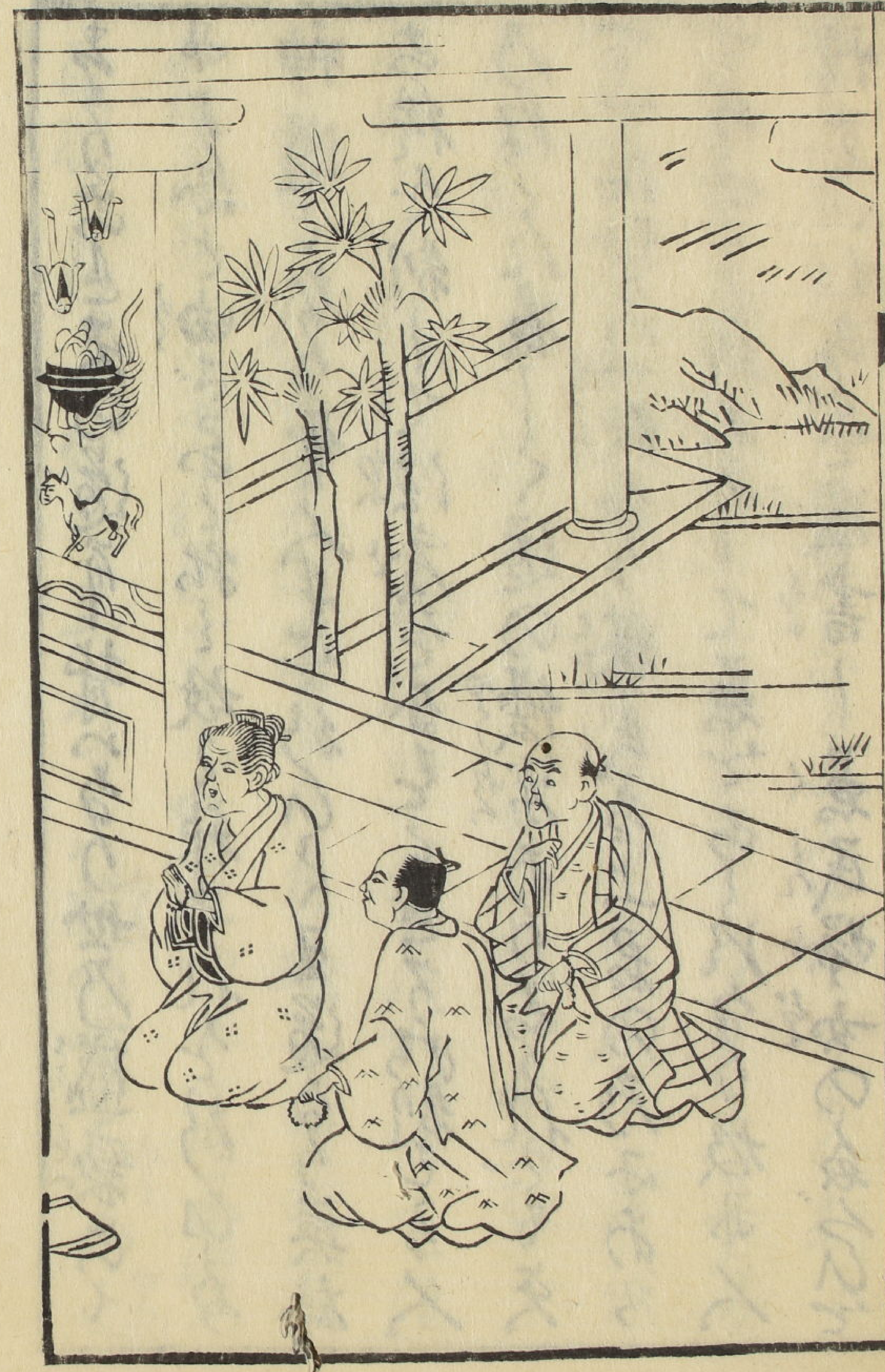
慎しめのいましめまで安産するときハなにゝそれるなり
ゆゑに女乃生死この時なりとく神慮をあふさを
隣れなき此世の人志んいまやいまだかならず
子侍るなりけれバなしといふべし死穢忌給ふ
再び蘇ることハ生の終るまでいとゞなくのうへ
時なれバ人君ハ好みて仁義を行ひ臣ハ賞をとし
子なれバ人臣まことふかくなび忠をなす諫をいひ
身命をなげうつもあるかなとも人のなかいでも再

子供をはぐくむてよく人子をよろこび孝をなすこととすべし。死はその人乃かぎりなる後は富貴貧賤其の人乃志し厚薄にかゝはりてよく喪乃禮儀なせとの志なし人情のうとうとしきゆゑにてまして神おとなく人に示しもなしや。まさ肉を食されの人を忌なふは鳥獣魚鼈は人の食なりとてみだりに殺害することなかれとなりまで鳥獣魚虫草木にまでも仁恕及ばしなりて

忌く人は志ありし能は世中に稀にも畜とはなるる死といひて何乃ござらぬまゝとて人事をなし千差万別のある事なりよく〳〵暁して神は和にかなひその法は聖の教なりとなつて世かれ人の道患よく講釈し詩文を著述まなと儒者といひ理を談じなどならぬそれ頑説なるどれて人そいはざるがちとそれ儒者なりとし虚とし聖乃道をかたくとりまくいふいしはなるし

聖の君ハ人情乃志るところをもてほどよく制し
萬民乃争(あらそ)ひ奪(うば)ふことなからしめよく太平なる
ハ天のみちなり天下乃ハ常にあるべし是故
天下をしろしく治るハ聖人なり故に聖ハむかし
にありて後乃世ハ英雄(ゑいゆう)いでゝ聖にかハりて治
をなすとこれまた天の道なり英雄その器(うつは)小なれ
ハ聖におとるゆゑ然れども王の道によらざる時ハ
民服さずてされし其志なしハ殷(いん)の世も紂(ちう)に亡(ほろぶ)

ありし是天の道ニ背けバなり世乃盛衰(せいすい)あつく
身よりても由(よ)ざるを故に神これをわかひ身
神道となり聖人是を行ひて王道なり英雄
其後を制して法度(はつと)をなさしめこれら制せる人
乃ほどんれ厳しく道の優劣(ゆうれつ)ありされども天
下を治むるハ一致(いつち)なり釈氏(しやくし)ハ上君の政にあら
ず其ので紙志めして悪をさとらしむなり故に人
情ちんいむるとを圖(づ)書し愚民婦女(ぐえんふぢよ)の多くひと



なすこと便也故に念佛をとなへ本尊をたて地
獄極楽乃説をしめす是下民の導となり故に
むかしより僧ハ貴しといへども噂をきゝて民乃
争ひ鎮むることしてその人々ハ哀情を
よくしれて死する家にいたりそのなりさまをも
てとく悪を懲らしむる故に死者を僧に頼み
せ地獄極楽をしりもある縁の引導によりてく
愚夫愚婦乃情欲安楽を好み労苦をいむ

を胸の中にとりて上ゐれの者とあんとする
いとめでたし是民を治る乃たすけとなるかく
あれば君上たる人もつねに釈氏を尊んずる
ことなし治の為すをとく信ずるに至りし
なれど儒など頑に覚つける人釈氏を不吉なる
もんく天下を治るにかゝわりて人情を衰へしめ
まさ我が道の敵なりなどいふ附会をなすと人
情ありと多く人なり愚夫愚婦の情を知らし

ろく尊たる釈氏に伝り今の世にいたりしさん人
乃ちんちうなどハ釈氏なんぞらと云べし。また
別世界にあれバとく死をるハはさるしまた死ハ
生の変なり儒ハ生の教也仏ハ死路の教へなり利
真儒も死してたちまち仏となりて儒に引導さる
事も無迹と母し死者乃霊魂を紙にのり力ぐ
きわず。さんぞん儒にかゝハらく葬るとも仏の
情ある事も無に死してハあまく屍を地に帰せる

をさめ一ツ其道をえらむとて此世にハすたゞ我ハ
生物乃情欲なるなくて死をも願ず。所得色欲ハ生
の職也八竅なのく欲を持て有り一竅にとの
と下の体の官と以て粗しぞの法にて是をなれ
口枝なりまた九竅など職なくて性欲多のある
なしこの職に外なるどもして奪争をとる奪争
いへどのく敵し争ふ勲みむとしさ迷情とはさ
まくすゝのたゞ見えなりさの奪争をとる人情を

失なく欲にまかせ礼儀を亡してかくあまねくむか
しのよし今世ハ正月一日二月二日三月三日四月四
日五月五日六月六日七月七日八月八日九月九日
十月十日十一月十一日十二月十二日とその月乃初の
日を祝日として人みなまもれば往来し互に情を
厚く睦しまゆるはさしむこれ禮義を示し
民乃なかそひて止むるゆゑとなりあなは是をまさ
に和し情で親しむの日すくなしと今の世ハ節

句と五ツにし月毎に朔日十五日あるにていよく
情はむつ揃しくし尊事を止むの急務とし各々
そのよし古称人乃情ハ何にもよりてをのに移り
変れりしとも秋など止もさびてうえ人の
心も静になりしかく物に感ずるのも多し古歌に
秋ハなは夕ぐれこそなかなれ萩の上風萩の下露
などありさまでいひまして意を深くそのはたがかく
ありて堪遊なりぬれそいとしく待まと十五夜の

月てりうるはしく夜あけもれりしくなかめんとぞ
えある人ハいふ万道河ニより思ニ惑ど多情は
いみしくなげくとて天乃道有待也
まだ秋の花ひらかれてわきう程の河にはきつらんかは
ある人かんかまねくうてなかれところみちく河に法を申て
うけおもんぞ猟遊不及なされいまろく賢明の人ぞ
いふ事ハ三月三日の比いとまのく情を動しまき
文王乃なかり給ふ河よてこれをかめつハ周南召南

也詩曰關〻雎鳩在河之洲窈窕淑女君子好逑
といへり雎鳩ハみさごなく雌雄まことよく別乃
あつしくて常にいそしきて契りて和ぎ鳴く夫婦の
閑くなり河の中の砂のすなはち流を淑とい
常にあそびて居る事外に見ず寝ゆる時びなれ
みだりに定りたる偶ありて事別をたゞしく外にあ
たしまぎれく雌雄並び遊びくなれ相狎ること
あらそひて淑女にたとへしてかくなり淑ハ善なり女とハ

いまだそひ嫁しなどせざれど情やさしくて容も窈(よう)
窕(ちう)と幽閑(ゆうかん)にして有德乃君子乃嫁となれバ
くびいとしく侍ることぞ文王の妃(きさき)をもとめくみる
まことにゐかにも文王の聖なる后妃(こうひ)の有德の淑
女にてよく人の情に通じ玉へて荒妾(せう)もみなのづる
ろのとくに化(くわ)していとしく侍るゆへの衆妾より后妃を
称して作れる詩に曰南有樛(キウ)木(ボク)葛(カツ)藟(ルイ)纍(ルイ)之樂(タノシム)只(カナ)
君子(ヲ)福履(リ)綏(ヤスンズ)之(ヲ)といへり南とは文王乃居国紙

さていふ樛木とは后妃(こうひ)にたとへ葛藟(かつらい)とは衆(しゆ)
妾(せう)にたとへたるなり后妃嫉妬(しつと)乃こゝろなけれバ
荒妾も是に化して后妃乃うへをいはふなをよ
されバ荒妾のあひだにも嫉妬(しつと)なくむつまじく諸侯
に君子で樂(たのしみ)しむとあり君子とは文王れこ紙
さいふ婦の夫(をつと)をうやまひく君子と云事
なり福(ふく)履(り)とは姆く禄なりこれを安して其
家日ゝにさかへて天下紙三分にして二ツを有(たもつ)と

いふと后妃嫉妬なくして外文王の聖徳も内
閨門おさまりていよいよ以て國ゆたかに民も日に服
従せしとなり依て后妾ともに君子を楽
しめしなり麟之跡振々公子とあり振々は仁厚
のこゝろなり武王周公旦ありて聖徳開闢この
衆の盛なるなりこれも仁徳あまねく下万
民に及び去後は麒麟のあしなやむ虫をふまず生草
をふまずして跡なきをかけりて仁厚のあらはる

がごとく文王后妃の聖徳武王周公ともに徳をそなへり
然れども麟は獣にてのがれさる文王のごとく世に比し
給らんやとて于嗟麟兮といえり世の人をしなへ
て多かくあるは不祥なりとて後世まで人に尊で
いふしくとてあそぶなまじなり去された婦女嫉妬
なれば浦まなり赤男も餓渇のごとく欲し妻は我
獨り寵を得んとおもひて夫を制し妾をいとふ事
和さぬてなし妾は嫁を嫁ん事を欲して妻

評曰人子之不可不教[redacted]如此

を呪咀(のろう)てせりむくしを待ちたまひ乃治まら
ずして外あるどりぞうしなふ廢(はい)家とてうしなふ所本
と邪まさ以くし其女ならで八重に称しが終り
父母兄弟にあしざまなどかうむらし世を云と
其闕るて垣(きき)をこゆる乃心生じてはしたなき男
なれ引つれとはさなき情ふるまいの死(つみ)共
云づしまき嫁(う)し家法さるれ以ひなふいの女
乃性質(むまれつき)の法さるきなり父母其罪かいふべからず

此情ハのがれがたき事なれバ時などをかく處女乃
侍る時ハ容姿(ようし)をいと見ぐるしく侍りて後ぞ憂(うれ)ひある
事文王乃河洲定て婚姻(えんいん)を二三月のあひだに
なさしむ詩ニ曰桃(モヽ)之夭夭(ヨウヨウ)灼灼(タルシヤクタル)其(ソノ)華(ハナアリ)之子(コノコ)于歸(キス)宜(ヨロシ)其
室家ニといへり桃(わう)ハ二三月の間ニ花さかりて夭(よう)く
とハ少好(わかくよき)の事なり灼(しやく)とハさかり乃盛(さう)りさかりなる
なり夭くハ未だ葉もなく花ひらくなり。これぞ
人乃情をもおもしろくなし女も婚姻の期(ご)に

もりたるハ容姿桃乃夭々みごとく君子を求むる
の意あることを物にたとへる詩の咲るめく艶なる歌
なれバ是春ハ万物もうらゝかに盛にして萬生
さる時の氣候をえて人もまさに等しく此時に
婚姻の期と為し天乃道に應じ玉ふ文王乃
御世に過ぎて見るの法さなるハいふまでもなけれど
継とれて内にうつくしき女ありて外れむつのしき男
ありし時ふの御な稀だ此也まさに此時に女子乃時

とするまふいふしきれ此国にても桃の節句に雛
立女子をはごふハ文王の教所謂ハまさに夫婦を
君臣父子乃なす子孫の源なり桃の節句といふハ
桃之夭々れなうひ萬なり雛ハ子孫の源なれバ
是を女子に志めし後の世に風にくめ子ま出
を佩ぶるこゝハ夫婦せんハ淑しくかれおる稀ざるに
とえんみせりてあり又鴛鴦乃和ぜ婦女の鏡
にたくもまさに雌雄を親く別をたゞし外に猶進

ばかり代女の意(こころ)にもしてやくあらしめんとなり是
をかゞみよしくハおのれ我家の鏡にてくなりし
給んと成り名(めい)誉(よ)ハ身なり人ハひさしく成りぬる
にあらず活きず夫(おつと)をも操(みさを)ひ事志の情も鏡の
ものとてらしてほころびを改めごとくをよく
志めしなりば関々(くわんくわん)に雎(しよ)鳩(きう)を窈(よう)窕(てう)淑(しゆく)女(ぢよ)に興し
かゞし女もかくのごとくよせて其意をはくし
くきんと思ふの心みく其情の正し貞を得んや

書紀んずしていさし貴重ハあるものを自らづまま
源氏物語歌の集なりなどよめる女まま源に
あまぞ流れくあやぞ弄(もてあそ)び又生ほまくハ文をい
みしも情も妙なし深くかきゆきといって母女の
文明あるすゞ君主の心情ハほさなきれハ其の
国亡し身をそこなふ礼姫を滅(めつ)さる事也
桀(けつ)紂(ちう)これなり夫(ふ)差(さ)も苑(ゑん)嚢(れい)み女(ぢよ)楽(らく)に紀文て
越(ゑつ)王(わう)にさき此国の義(よし)仲(なか)義経(つね)も此ならず

陶ゝ堯乃二女をめ樂とし舜にあるハ此國乃
天照大神天鈿女を女樂とし猿田彦大神
に遣し給ふてそいさゝめ給ひ人の情ハ世をうし
と今もかはることなく年ゝに和いよく繁て
情を樂しめるなど。和に流行てぞ作れ著
神雅樂ハ今の能よりも人の情を和したり
能ハまさその狂言にしかず。人情ハ和しる
のミ又世乃人神雅樂ハ人間中のとのみなら

ずなどれのみめでたし。むかし神雅樂ハなじ
兒女ハ心を和しまりなどいひ今も見もをさま
ありし。今の人らけふ見ゆる。四条川原紙
画家もはさなし似云がごくなすりしが。河かわ
まくいと志んなる見ゆ稽

兒談巻之一終